



トウネズミモチ

95 篇の冒頭の **主に向かって喜び歌おう**。との言葉は、詩編の本質である賛美、また礼拝の心髄を指していると思います。詩編の最大の詩人はダビデですが、イスラエルの最初の歌い手は「海の歌」を歌ったモーセであり、それに呼応して合唱したのは民でした。出エジプトという神の御業、しるしを体験し、歓喜の声をあげたのです。

私たち信仰者は **主に向かって喜び歌おう**。と、礼拝の度に、喜びつつ、歌を歌いつつ、主に向かうことが伝統になっています。全身で喜びを表現できる私たちは、なんと幸いなことでしょう。

最初に **救いの岩に向かって喜びの叫びをあげよう。(1)** と、主を **救いの岩** と呼び、崇めています。これは 8 節以下に記されているように、イスラエルの民の荒れ野での試練の出来事から生まれた言葉です。出エジプトを果たしたものの、荒れ野に水がなく、喉が渴いた民はモーセに不平を述べ、モーセを殺そうとさえしました。主はモーセに岩を杖で打てと命じました。モーセがそのようにすると、岩から水が出たのです。文字どおり **救いの岩** となったのです。民はこのことを忘れず **御前に進み、感謝をささげ／樂の音に合わせて喜びの叫びをあげよう。(2)** と、主を礼拝し、捧げものをし、賛美したのです。

続いて賛美している点は **主は大いなる神／すべての神を超えて大いなる王。(3)** と、神々を超越して君臨する神ということです。昔も今も、人間は欲望に突き動かされ、自利に走る闇のような世界で、不安になり、神を求めます。誰も自分の神こそ最も大いなる神と信じます。この点で考えを異にする他者と対立するものです。

次に賛美している点は、天地創造の神であることです。 **深い地の底も御手の内にあり／山々の頂も主のもの。(4)** をという美しい表現で、壮大な天地が目浮かぶようです。

続いて、人間創造の神であると賛美しています。 **わたしたちを造られた方／主の御前にひざまずこう。共にひれ伏し、伏し拝もう。(6)** と、創造主として、人から遠く、遥かに高いところにおられる方として崇めています。しかし、ダビデが **主は羊飼、わたしには何も欠けることがない。(23:1)** と歌ったことを踏襲して、 **主はわたしたちの神、わたしたちは主の民／主に養われる群れ、御手の内にある羊。今日こそ、主の声に聞き従わなければならない(7)** と、主を弱い羊を養う羊飼として、非常に身近なところで見守ってくださる方として慕い、その声に従うと述べています。

最後に、最初に歌った **救いの岩** の故事を再び記し、民の不信、頑なさに対する神の怒りと裁きの 40 年があったことを告白しています。

『讚美歌 21』は 144「主に向かって喜びうたおう」 [讚美歌のページ \(rgr.jp\)](http://www.rgr.jp) が、1 節から 7 節までをそのまま答唱の形で歌っています。その他のも、20、226、362、516 を関連付けています。

ジュネーブ詩編歌はリコーダーの演奏で、2 曲から構成され、美しく静かな賛歌です。

<https://www.youtube.com/watch?v=LotbQ0XQwGI&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=95>